

〔武江年表六〕此年間○安記事  
箱入温石始める

○按ズルニ、温石ノ事ハ、金石部玉石篇ニ詳ナリ、

〔新撰字鏡草〕荊菊二字波々支

藝波々支

〔倭名類聚抄竹器〕兼名苑云、簾酒音一名簾波々木

祥歲反、和名

〔箋注倭名類聚抄竹器〕玉篇簾俗帶字、說文、帶、糞也、从又持巾埽門内、古者少康初作簾帶秋酒、說文又云彗、埽竹也、簾彗或从竹略○中按、波波岐羽掃之義、謂以鳥羽除糞也、新撰字鏡又有羽字、訓波波支、蓋皇國會意字、可以證羽掃之義、今俗譌呼保宇岐、南部謂之波岐、蓋古用鳥翅掃糞、謂之波岐波久、當是活用羽訓波者、然則所以掃之物、宜云波岐、猶謂所以扇之物爲阿布岐也、南部謂之波岐者、蓋古言之遺也、後用草若竹造、亦名波岐、故用鳥羽造者、別謂之波波岐、然後波波岐又爲所以掃之物總稱、再呼鳥羽造者、爲登利波波岐、見千載集物名歌、今俗呼爲波保宇岐、

〔事物紀原八〕簾簾世本曰、少康作簾簾

飯帚 許慎云、陳留以飯帚爲糞、今人亦呼飯簾爲糞、慎旣漢人所記、疑皆秦漢時事耳、

〔下學集器財〕簾簾二字義同、簾同字也、

〔饅頭屋本節用集波寶〕簾

〔書言字考節用集七〕簾文選註、掃、彗、簾字彙俗

〔倭訓栢波中編二十〕は、き、簾をよめり、靈異記に簾も同じ、羽掃の義成べし、千載集物名に、鳥は、

き見えた、豊後詞には、きをはきといひ、はくことをはくといふなり、竹は、きをくはは、きともいへり、かまは、きは炊帚也、

〔後奈良院御撰何曾〕女房のかみそぎたるはふきにはうへもなし

ほうき